

葛城・二上水系にみる古代コスモロジーに関する研究

研究年度・期間：平成 13 年度

研究ディレクター：井関 和代

(工芸学科 教授)

共同研究者：下休場千秋 館 美奈子

(環境計画学科 助教授) (芸術文化研究科 助手)

研究助言者：嶋田 義仁

(名古屋大学 教授)

研究補助者：篠田 暁子 上羽 陽子

(芸術文化研究科 助手) (芸術文化研究科 後期課程)

本研究の目的は、本学が立地する南河内地方、特に「葛城・二上水系」における古代コスモロジーを明らかにすることにあつた。

そこで古代稲作文化のコスモロジーを探る方法として水系に着目した。何故ならば、古代稲作農耕民にとっては農業用水の確保は最重要の課題であつたと考えたからである。温帯地方に属する日本では元来、熱帯作物である稲栽培には適していない。それにもかかわらず日本が類まれな稲作国になりえたのは、降水量の豊富さに加えて小盆地的地形条件が大きかつたといえる。つまり、土木技術の未熟な時代に、河川から取水を行うなどということは不可能なことであり、山々から滲み出るように流れ出してくる小河川が灌漑技術の未熟な時代の稲作を可能とした。なだらかな丘陵の傾斜や山の斜面を利用した棚田こそが、まず水を確保する農耕地として開発されたと考えられる。そこで本研究では葛城・二上山麓における地形、水系、土地利用を中心とした現地調査及び関連資料の収集を行った。

また、本研究の研究ディレクター・井関と研究員・下休場は、これまでアフリカにおいて研究調査を重ねてきた。両員は現地調査で、「水の精」などと呼ばれる「水」への信仰が、彼らの意識の根底にあることを多くみてきた。そのため、本テーマに即した研究対象地域における村々に伝承されてきた水路に関する説話や祭祀・祭祀具(造形品)などに注目し、研究参加者においては各自の調査において、これらの聞き取りを行い、共同研究会の場においては調査資料に対する私感の交換を求めるとし、多分野から古代河内のコスモロジーを探る研究・調査方法を画した。

そこで、共同研究員一同が役割分担とテーマ把握のために年 6 回の共同研究会を設けることにした。また各自はこの共同研究会でた問題点を、次回開催の期日までに調査することとした。概要は以下のとおりである。

準備会合 5 / 26 信州大学・阿久津昌三教授を交え、「王権のコスモロジー」をテーマに「河内王権」についての討論

- 第1回 7/7 研究費の使途、研究方針と研究分担、今後の共同研究会についての打ち合わせ会合
- 第2回 7/10 午前；河内郷土史家（元本学・非常勤講師）の古田実氏による講演会「古墳時代の灌漑用水。石川郷の古代豪族」
午後；古田実氏の案内による富田林市から羽曳野市・藤井寺市における灌漑用水と古市大溝の見学
- 第3回 7/22 前回の「石川郷の古代豪族」と太子町・河南町における勢力範囲に検討をつけ、「太井川と太子町の灌漑」を現地調査
- 第4回 9/10 研究会メンバー名古屋大学教授・嶋田義仁を演者に、「古代コスモロジーに関する一考察」をテーマに研究会を行う。
- 第5回 12/27 古田実氏の案内による太子町・河南町・千早赤坂村における古代灌漑用水の見学。
- 第6回 2/1 午前；太子町、西村・馬場両氏から太子町山田の「水利」を中心に聞き取り調査
午後；旧山田郷の灌漑池と用水の見学
- 第8回 2/23 本年度の最終共同研究会としての報告会

これら共同研究会のうち、第2～4回の主テーマは古墳時代の河内国川郷に在った古代豪族の支配地とその灌漑の様相であった。

1. 紺口県主.....河内古来からの在地氏族（現富田林市水守）
2. 紀氏系.....（太子町春日）
3. 大伴氏、林（氏）系.....（富田林市錦織、藤井寺市林）
4. 蘇我氏、石川氏族.....武内宿禰の後と称する蘇我氏系
河辺朝臣（富田林市川野辺）
石川朝臣（太子町山田・河南町一須賀）
箭口朝臣
5. 物部氏族
6. 山代氏族.....（富田林市山城）
7. 佐伯宿禰.....（富田林市佐備）
8. 渡来系氏族.....百濟系 新羅系 高句麗系（羽曳野市・藤井寺市などに多く分布、職能集団を抱える）
中国系

そして、石川からの疏水による大規模な灌漑遺構を平野部に残しているのが、応神御陵を中心とする古市大溝・土師溝などであり、谷合を塞止めた形で灌漑用水をたくわえる溜池が連なる形となって多く点在するのが山麓部となっているなどから、これらを3地域に区分し、本年度は太子町に水源を持つ、太井川の流域を中心に研究を絞ることにした。

具体的な研究内容と成果は以下のとおりである。

研究員メンバーの下休場は研究資料として太子町を中心とする研究地域の 2500 分の 1 地形図（国土地理院発行）明治初期の旧版地図（大日本帝国陸地測量部発行）新旧空中写真（日本地図センター発行）を収集した。これらの地図類及び空中写真の分析と現地調査により、古代における水系・地形を地図上に復元し、さらには水田・集落を中心とする土地利用との関連性について考察を行った。

その結果、近年になって大規模な土木開発が行われた場所以外では、古代の農業水利に関わるいくつかの水路・ため池の存在を現地と地図上において確認することができた。また、これらの水路・ため池と水田・集落、さらには信仰の対象である神社、古墳、山との地理的関連性を現地調査を通じて探ることにした。そして、国家的事業としての古墳造設が南河内・藤井寺市、羽曳野市のなだらかな丘陵地を農地に拓いていった時期と重複するのではないかと、また、限られた土木技術しかなかった古代において人々はいかにして、葛城・二上山系の河川を利用したかななどを問題提起とし、これらの解明を研究目的に、自然環境と土地の傾斜利用を調査した。また調査の中心地となった太子町山田の現地調査については、これに参加した本学・大学院芸術文化研究科前期課程の学生たちへの指導にあった。

調査に同行した研究助言者・嶋田義仁も太子町（旧山田郷）に点在する敏達天皇陵をはじめとする王陵群（梅鉢古墳群）・河内蘇我氏の古墳群の造営技術が、この山麓の農地開拓に大きな影響があったのではないかと、多くの示唆を参加者に与えた。また「記紀」に記述された資料から、大和朝廷の支配者層と彼らの故地であった河内との関連性に注目した。また、郷土史家・古田実氏は、太子町や河南町などを支配していた古代豪族の勢力範囲を示され、その勢力圏内に存在する産土神社の関連性を説かれた。そこで、研究会参加メンバー各自が分担し、各地区に「座す神」を調査し、その多くが水や鉄に関わる古代豪族の主神に繋がり、また現代にあっても農地用水溝として利用される古代灌漑遺構の近くに「祠」「神社」が残されていることを確認した。

研究ディレクター・井関和代は山田を中心とする調査・研究全体の総括を行うとともに、南河内における歳事を中心に、現在にまでも南河内一帯で伝承される祭祀、風習、料理等の聞き取り調査を行った。これは大阪平野は西に大阪湾、東・南・北が山に囲まれた細長い地形となり、さらに淀川・大和川によって分断され、さらにかつては摂津・泉州・河内（北河内・中河内・南河内）に分かれ、各地域によって異なる習俗がみられるためである。

例えば、田の畔を利用して作られてきた大豆を用いて作られる「味噌」も、大豆・塩・麹に加えるものが「米」「麦」と異なる事や、同じ南河内にあっても河内長野の滝畑では大豆を煎って粉にした「赤味噌」、平地にある藤井寺市では大豆を煮た「白味噌」を作り、また河内名物「粥」も一様にみえるものの、その料理方法が異なるといった具合である。

そのため、大和川以南を南北に流れる石川の右岸と左岸、とくに左岸となる葛城・二上山系にある集落は、山地と谷川によって区切られ、各川筋によって経済・文化的背景が異なること

を確認した。また、右岸となる富田林市（美具留魂ミグクルミタマ神社）羽曳野市・藤井寺市（菅田八幡宮＝応神天皇）など、灌漑用水路や石川沿いによって比較的広範囲の文化的特徴を示すのに対して、左岸となる河南町・太子町では谷合が異なると小規模単位の集合性が観察され、各々が異なった神備山（神山 カミヤマ・コウサン）を水源として、これらを信仰の対象としてきたことなどが、明らかとなった。そして、太子町山田では時代によって異なる信仰の対象を代えてきたことを知ることとなった（二上山、神山、科長神社）。

しかし、本研究はその途に着いたばかりであり、多くの疑問点を抱えたままに、本年度を終えた。次年度も引き続いて同テーマを追究し、南河内のコスモロジーを明らかにしたいと計画している。（井関 和代記）



石川郡（イシカワノゴウリ）石川左岸の現太子町・河南町・富田林市）における古代氏族分布図

石川郡（イシカワノゴウリ 石川左岸の現太子町・河南町・富田林市）における古代氏族分布図